琉球大学学術リポジトリ

沖縄における国境を越えた移動とエスニック・ネットワーク

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010173

沖縄における国境を越えた移動とエスニック・ネットワーク

野入直美

1．多民族社会・沖縄の特殊性

沖縄社会のエスニックな多様性は、広大な在日米軍基地の存在によって大きく規定されてきた。「米軍人・軍属とその家族」は、沖縄県内に約5万人が居住している。彼らは日本の出入国管理法や外国人登録法の対象外であり、日米地位協定によって日本における身分を保障されている。彼らの人口は、沖縄における外国人登録者数の約6倍にのぼる。このような比率は全国に類を見ない。沖縄県の人口に占める外国人登録者の比率は0.6パーセントに過ぎないが、外国人登録者に「米軍人・軍属とその家族」を加えて算出すると4.1パーセントとなる。「米軍人・軍属とその家族」を含めれば、沖縄は、外国人が人口に占める比率において、実質的には東京や大阪を上回っている。

沖縄の「米軍人・軍属とその家族」の多くは、米軍基地内に居住しているが、基地の外の賃貸住宅などに居住する人々もいる。彼らのほとんどは3年から5年で転勤などによって沖縄から移動していくが、いくらかは沖縄人と結婚し、あるいは仕事を見つけ、軍隊をやめた後に外国人登録を行って沖縄社会に定住する。沖縄の定住アメリカ人の多くは、このような元軍人・軍属である。さらに、ホスト社会としての沖縄について語るときに見過ごしにできないのは、沖縄女性とアメリカ人男性を両親に持つアメラジアンの人々である。彼らは「米軍人・軍属とその家族」の内部に、あるいは彼らと定住アメリカ人との境界に、さらにこれらアメリカ人と沖縄人との境界に誕生している。

広大な米軍基地の駐留は、外国人登録を行って居住している定住外国人の構成にも大きな影響を及ぼしてきた。全国的には最大のエスニック・マイノリティ集団は韓国・朝鮮籍であるのに対し、沖縄ではアメリカ国籍が最大のグループである。2番目に大きいグループは全国・沖縄ともに中国籍だが、沖縄の場合、その内訳に台湾にルーツを持つ人が多いことが特徴的である。台湾人は、台湾と沖縄との地理的な近接性と緊密な交流の歴史を背景として沖縄に居住してきたのだが、今回の調査によって、いくらかの台湾人もまた米軍基地との関連で来沖、就労してきたことが明らかになった。さらに沖縄で3番目に大きいグループ、フィリピン国籍の内訳は、ほとんどが基地周辺の歓楽街で働くエンターテイナーの女性たちである。ホスト社会としての沖縄は、低賃金労働者の受け皿となる製造業が不振を続けてきたこともあり、米軍基地の駐留によって大きく規定される、全国的に見てきわめて特殊な多民族社会であると言える。

2．調査の課題と方法

このようなホスト社会としての特殊性は、沖縄に定住している日系人と定住外国人によっていかに体験され、意味づけられているのだろうか。筆者は、2003年度の社会学実習の受講生18名と大学院生1名とともに、45名の日系人・定住外国人のインタビュー調査を行った。

調査対象は、外国人登録を行っている定住外国人の人数が最も多いグループから（1）アメラジアンを含む定住アメリカ人、そして国際結婚などで沖縄社会と関係を結んできた一部の軍

人・軍属、（2）台湾人を選び、さらに多民族社会・沖縄の重要な構成要素である日系人から最大グループである（3）日系ペルー人、（4）日系ブラジル人を選んだ。

アメリカ人は、日本における従来のエスニック・マイノリティを対象とする社会学的調査では対象になってこなかった。この調査でアメリカ人を対象に含めたのは、第一に前述した沖縄社会の特殊性によるものであり、第二に、他のエスニック・マイノリティ集団に対するアメリカ人の特権性が鮮明に浮かび上がるのではないかという、調査に先立つ予想のためであった。さらに我々は、沖縄在住の日系人について、親族ネットワークに動機づけられて来沖し、定住過程においても親族ネットワークを核とする同心円状の地縁・血縁ネットワークに支えられて居住や就労を果たしているであろうという予想を立てた。結論を先取りして言えば、アメリカ人の特権性および日系人の親族ネットワークを中心とする定住過程という当初の予想は、調査結果によって双方とも覆ることになった。

調査の課題は、第一に、沖縄における日系人と定住外国人の、国境を越えた人の移動の類型を明らかにすることである。日系人については、日本国内の移動を含めた来沖過程を踏まえることが課題とされた。第二の課題は、日系人と定住外国人の沖縄への定住過程を詳細に聞き取ることによって、ホスト社会としての沖縄の現状と課題と照らし出すことである。ここでは、文化資本としての言語、エスニック・ネットワークへのアクセス可能性、定住過程におけるエスニック・アイデンティティの変容、親族の相互扶助関係が、分析枠組みにおいて焦点化された。

2003 年 8 月に、半定形型のインタビュー調査が行われた。調査時間は、対象者一人あたり 40 分から数時間に及んだ。調査内容は基本的に対象者の許可を得た上で録音し、記録をすべて反訳した後に分析を行った。

調査対象者は、各種団体、エスニック・レストラン、知人からの紹介を機縁的に広げて得たものである。なお、調査者の言語能力上の制約によって、アメリカグループ以外は基本的に日本語でインタビューに応じられる人を対象者としており、日本語が流暢に話せない日系人、定住外国人を対象に含むことができていないことをあらかじめお断りしておきたい。

3．分析から見えてきた在沖日系人・定住外国人の移動類型と定住過程

(1) 米軍基地を背景とする移動と定住 - アメリカ人の移動類型

沖縄におけるアメリカ人の来沖は、①父親もしくは自分自身が米軍人であり、沖縄の米軍基地で勤務するために来沖したという事例が多数を占めている点、②親族ネットワークとは切り離されており、「家族・親族の呼び寄せ」または「トートーメーをつぐため」という理由はほぼ見出せない点、③「出稼ぎ」など経済的理由による移動は全く見出せない点で、他のエスニック・マイノリティと大きく異なっている。

沖縄には 2 種類のアメリカ人が居住している。前者は約 5 万人からなる米兵・米軍族とその家族である。彼らは外国人登録が不要であることや住居・生活についてさまざまな特権を持ち、基地内にいる限りは英語だけで生活できる。後者は外国人登録をして居住している定住アメリカ人で、沖縄県在住のアメリカ人の中では少数派である。元軍人・軍属が多いが、基地の恩恵

にアクセスできず、また「米兵」と混同されて飲食店から締め出されたりしており、他の都道府県ではあまり見られない「偏見でまなざされるアメリカ人」の体験を持っている。

今回の調査でアメリカ人を対象に加えたのは、他のエスニック・グループに比べて、英語という文化資本、米軍基地、人種に依拠した特権性が浮き彫りになるという予想があったためである。しかし調査結果は、定住アメリカ人、そしてアメラジアン（アメリカ人、とくに米軍関係者を父親に、アジア人女性を母親にする人々）については、人種にかかわらず、ホスト社会沖縄の中でマイノリティとしての体験をしていることを示している。

英語という文化資本は、基地内に生活の比重がある米軍人・軍属にとっては、ほとんど意識されることがない。定住アメリカ人にとっては、多くの場合、日本語ができてバイリンガルであって初めて労働市場で価値を発揮する。さらに、今回の調査結果に限定して言えば、沖縄におけるバイリンガルとしてはアメリカ人の英語よりも台湾人の中国語の方が、沖縄では市場価値が高い。英語教師の数倍を、台湾人貿易商は稼いでいる。

米軍人・軍属と定住アメリカ人という2種類のアメリカ人のはざまに、さらにアメリカ人と沖縄人のはざまにアメラジアンがいる。1998年のアメラジアンスクール・イン・オキナワの設立は、沖縄人のシングル・マザーによって基地の外で育てられている、基地にも公立学校にも学びの場をもてないアメラジアンの子どもたちをめぐる問題を浮き彫りにした。一方、今回の調査対象者3人は、3人とも父親とともに暮らし、基地内で英語による教育を受けている。国籍は全員、米国籍のみである。今回の調査では、基地育ちのアメラジアンもまた、アイデンティティをめぐる葛藤やホスト社会との緊張をはらんだ関係を体験していることが明らかになった（語り1）。

(2) 台湾人の来沖類型とハイブリディティ

台湾人対象者の来沖の類型として、貿易あるいは米軍基地の払い下げ品販売をといった自営事業のために親もしくは本人が移住してきたものが多い（11人中6人）。高学歴、高い日本語能力、さらに韓国語・英語能力を持つ人が多いことが特徴だが、来沖当初から富裕層なのではなく、「進学」「留学」「自営」を尊ぶハビトゥスに支えられて上昇してきた（語り2）。

来沖直後、多くの台湾人は家族経営の零細な自営業で生計を立てているのだが、ゆとりがあるとは言いがたい家計の中で、子弟の大学進学と海外留学は高い優先順位をつけられた。それは、ひとつには自営業、とくに貿易業に就く上で、日本語と中国語はもちろん、英語と、できれば韓国語などの外国語を子弟に習得させるためである。さらに、さまざまな文化に触れて幅広い視野を身につけることに高い価値が置かれてきた。

沖縄の公立学校に通った台湾人対象者のほぼ全員が、「タイワナー（註：台湾人）」と呼ばれていじめられた経験を語っているが、成人後に台湾に対するネガティブな感情を引きずっている対象者は皆無であった。とくにアメリカに留学し、世界にまたがる華僑ネットワークの豊かさに驚愕し、自分もその一翼を担えることに気づいた台湾人が、人的ネットワークを得るとともに、肯定的なエスニック・アイデンティティを抱いて沖縄に戻ってきているのが興味深い。そのエスニック・アイデンティティは、便宜的に行われる日本国籍への帰化とはなんら矛盾しないのである。

台湾人のエスニックネットワークは、沖縄において最大規模（約300世帯が参加する琉球華僑総会など）である。在沖華僑を結び、台湾―沖縄を結ぶビジネス・ネットワークが中心だが、初の女性理事長のもとで華僑の子どものための中国語講座開設、琉球台医会の創立などの台湾と沖縄の橋渡しも積極的にすすめている。今回の調査では、台湾人・沖縄人のダブルや2世、3世の中に、場面に応じて縦横に「台湾人」「日本人」「沖縄人」のアイデンティティを使い分ける＜戦略的ハイブリディティ＞が見出せた（語り3）。

(3) 日系人の来沖過程とエスニック・ネットワーク

日系ペルー人と日系ブラジル人の来沖は、「トートーメー」（仏壇行事）継承や親族の呼び寄せ、または親族を頼ってというパターンが多い。ただし、①かつて沖縄から南米に移民が渡り、②その子・孫がいったん神奈川や埼玉に就労目的で来日して③その後に沖縄に移動してくるという、＜三点型移動＞が対象者の半数を占めた。出国の動機づけとして経済・社会不安をあげた人が多い（語り4）。

南米におけるエスニック・ネットワークについて、日系ブラジル人対象者12人中4人しか日系あるいは沖縄系の組織に参加していなかった。日系ペルー人対象者の半数が日系人子弟の多いラ・ウニオン校に通い、それ以外の人もラ・ウニオン運動場（註：カフェなどもある社交場）の会員となり、日系人とモアイ（註：民間の相互融資。頼母子講と同義）をするなどして、全員がエスニック・ネットワークに加わっていたこととは対照的である。南米における民族関係について、日系ブラジル人は地域や学校でむしろブラジル人と緊密な関係を結んでいたのに対して、日系ペルー人は親が「日本人以外と遊ぶな」としつけていたなど、ブラジル：＜ローカル・ネットワーク志向＞とペルー：＜エスニック・ネットワーク志向＞の違いが見出せた（語り5）。

その二類型は、来沖後もあてはまる。日系ブラジル人は、来沖後はローカルな、沖縄人との結合関係を重視し、意識的に日系ブラジル人のエスニック・ネットワークは避けるという人さえいたのに対し、日系ペルー人の対象者の多くは日系人どうしの集いを継続している。エスニック・ネットワークを体験してきたという経験知の豊かさが、国境を越えた移動の後に、別の形のエスニック・ネットワークを結合することを促進しているのではないか。ちなみに、日系ペルー人のエスニック・ネットワークは、ペルー時代は「日本」にこだわり、ラ・ウニオンを中心とする組織的な、フォーマル型の比重が大きいが、来沖後はペルーの料理を楽しむ日系人の友人どうしのパーティなど、個人的な、インフォーマル型の比重が大きくなる（語り6）。

日系ペルー人と日系ブラジル人のエスニック・ネットワークへのスタンスの違いは、彼らのエスニック・アイデンティティとも深く関わっている。日系ブラジル人のうち、ブラジル時代に自分を「日本人」と思っていた人は半数を切り、「半分・半分」、「ブラジル人」と思っていた人もいた。ペルー時代の日系ペルー人はほぼ全員が自分を「日本人」（日系人）と同定していた。沖縄でのアイデンティティを（ペルー／ブラジル人と日本人の）「両方」「半分・半分」とする比率はペルーとブラジルで大差ない（1／3程度）が、日系ペルー人は、ペルー時代の「日本人」としての意識が沖縄で「ペルー人」「半分・半分」に変化しているケースがいくつかあった。このアイデンティティ変容は、外国人としてまなざされた経験に影響を受けている（語り7）。

国籍について、日系人対象者のほとんどは日本国籍を持っているか、帰化を申請中である。帰化の理由は、外国籍であることによる生活上の不利益があげられるが、日系ブラジル人の何人かからは「日本人なのに外国人扱いされるのが嫌だから」(例：就学通知が来ない、教育委員会で就学義務はないと言われるなど）をあげており、国籍をとって日本人になりたいという志向性が見出せる（語り８)。一方、いくらかの日系ペルー人の語りからは、帰化後に同僚が「あなたも同じ日本人になったね」と言うのに同意できない、エスニック・アイデンティティと国籍選択が必ずしも一致しないという意識が見られた（語り９)。

信仰について、日系人の多くは南米でキリスト教信仰とトートーメーを両立させ、まったく葛藤は存在しなかった。ブラジルでの墓参りは花と線香ではなくローソクを携えていくなど、キリスト教文化との融合がみられる。来沖後は、親戚の家に集うことも含めると、ほとんどの日系人対象者がトートーメーをしている。キリスト教信仰を継続している人も多いが、教会に行く機会は減っている。

(4) 沖縄に対するイメージその他

来日前、日系人の調査対象者の多くは、先進的な工業国と、祖父母がノスタルジーをこめて語る「正直」「勤勉」「清潔」な日本をイメージしていた（語り 10)。アメリカ人は戦争映画のイメージを語る人がいた。来沖直後、全てのエスニック・グループで最も多いのは沖縄の「田舎」ぶりに対するショックである（語り 11)。さらに日系人のいくらかは、沖縄人が意外に法事などのフォーマルな場面以外の親戚づきあい、相互扶助をしないことへの驚きを語っている（語り 12)。調査に先立って、日系人の沖縄における関係はまず親族ネットワークに支えられ、同心円的に広がっていくという予想を立てていたが、これは覆された。台湾人は、沖縄のマーケットの小ささを自覚しつつも、台湾と沖縄の緊密な結びつきをビジネスや華僑のネットワークに生かしていこうとする志向性が強い。全てのグループの女性から、日本・沖縄は女性差別的であるという指摘があった。沖縄が「いちゃりばちょーでー」(註：会えば兄弟の意。隔てをおかない温かな県民性を指す）だと言う人は、日系ペルー人が 12 人中 9 人、日系ブラジル人 12 人中 2 人、台湾人 11 人中 3 人、アメリカ人 10 人中 6 人であった。相対的に若い世代ほど「ケースバイケース」という回答が多くなる。

島国の狭い視野にとどまらず、もっと広い視野を持ってほしいという沖縄人へのメッセージは、台湾人、アメリカ人対象者によって語られた（語り 13)。

国際結婚をして子どもがいる 16 家庭の半数では、エスニック・マイノリティの親は、2 言語で子どもと会話している。親自身が日本語だと上手く言えないためというのは日系ブラジル人 2 人のみで、意識的に言語継承を試みている家庭が多い。組織的に言語・文化継承を行っているのは、沖縄では台湾人だけである。

自治体に対する要望としては、多言語表示、バイリンガル職員の配置、外国人向けガイドブックの発行などがあがったが、他に「定住歴の長い自分たちを役立ててほしい」「外国人の意見を言える場、外国人どうしをつなげる交流の場がほしい」などがあった。サービスの受け手に留まらず、主体的に発信し、支えあいたいという意識が見出せた（語り 14)。

4．知見のまとめ

(1) 在沖アメリカ人の「特権性」

ホスト社会沖縄におけるアメリカ人の特権性は、自明視されるべきではない。軍人・軍属とその家族に付与される、日米地位協定による特権性は、軍人・軍属が定住アメリカ人へと、さらにその子どもであるアメラジアンへと、ライフコースや世代が推移するに従って失われていき、代わって沖縄人の反基地感情に根ざしたスティグマが付与される。

(2) 日系人と親族ネットワーク

日系人は、必ずしも親族ネットワークの緊密な網の目に支えられて就労や地域社会への定住を果たしてきたわけではない。親族がいることは沖縄に来る契機ではあるが、とくに日系ペルー人がペルーで体験し、沖縄の親族に対して来沖当初に期待する日々の親睦や日常的な相互扶助は、沖縄での定住過程においてあまり見出せない。

日系ペルー人と日系ブラジル人との間には、来日前後を通じて＜エスニック・ネットワーク志向＞と＜ローカル・ネットワーク志向＞の違いが見出せた。

(3) 台湾人の戦略的ハイブリディティ

４つのエスニック・グループすべてにおいて、世代の推移と国際結婚によるハイブリッド化が見出せる。最も自覚的に、ビジネスと結びつけて戦略的にハイブリディティを打ち出しているのは台湾人である。台湾人というエスニシティは、多様な出自を含み、世界各国に広がる華僑の親族・知人のネットワークにつながるものとしてとらえられている。とくに若い世代の台湾人は、固定的な伝統の維持よりもハイブリディティにこそ、華僑の活路を見出している。

(4) 残された課題

2003年度調査において残された課題を整理しておきたい。アメリカ人については、当初、アフロ系アメリカ人とコケージアン（白人）からそれぞれ聞き取りをし、両者を対比しようと計画していたのだが、沖縄に定住しているアフロ系アメリカ人を対象者として得ることができなかった。アフロ系アメリカ人が集う様子は、沖縄において日常的に目にする。我々はアフロ系アメリカ人が集う教会やスポーツクラブなどをまわって対象者を求めたが、そこに集っていた人々はすべて、基地内に居住し、地元住民とほとんど関係をもたない軍人・軍属であった。定住するアフロ系アメリカ人を探しえなかったのは、単に我々の機縁的な調査方法に限界があったのか、それとも現実に、アフロ系アメリカ人は軍人の身分を失った後に沖縄で職を得て定住化することが困難なのか、ここでは断定することはできない。今後、定住アメリカ人と沖縄人の関係を検討するときに残された課題である。

アメリカグループについて残されたもう一つの大きな課題は、成人アメラジアンの分析である。日系人・定住外国人と沖縄人の関係に注目してホスト社会としての沖縄を見ていこうとするとき、二つのグループのはざまに生きるアメラジアンの体験は、きわめて豊かな示唆を与えてくれるものとなる。

台湾人については、戦略的ハイブリディティの展開を可能にしてきた要素を検討することが課題として残された。今回の調査から見えてきたこととして、彼らは沖縄で最も定住歴が長く、さらに凝集性の高いフォーマルな同胞組織を編んできたこと、さらに自営志向が強く、言語習得や異文化体験に高い価値づけを置くハビトゥスを持ってきたことが挙げられる。それに加えて今後分析を進めるとすれば、職場や地域社会における沖縄人との関係についてである。台湾と沖縄の間には、双方向的な移住の関係の歴史がある。例えば本章で触れた琉球台医会は、台湾の医師と沖縄在住の華僑の医師のみならず、植民地下の台湾で就学・就労した沖縄人の医師が参加するネットワークなのである。台湾 - 沖縄間の双方向的な人の移住と定住の体験が、沖縄人と台湾人の関係にどのような影響を及ぼしてきたのかは、興味深い分析テーマとなる。

日系人については、他の都道府県で行われてきた日系人の移動と定住についての先行研究と照らし合わせ、ホスト社会としての沖縄の普遍性と特殊性を明らかにしていくことが課題となる。ひとつの仮説として、就労の受け皿が小さい沖縄では日系人の人口規模が限られることが、ホスト社会としての沖縄を特徴づけているのではないかと考えられる。インフォーマルなエスニック・ネットワークはいくつか編まれているが、日系人の顕在的なエスニック・コミュニティは沖縄では今後も成立しないのではないだろうか。日系人が集住せず、地域社会や職場においても異なる文化的背景をもつ他者として顕在化していない状況は、一瞥すると、あたかも日系人がなんの齟齬もなくホスト社会に溶け込んでいるかのように見える。しかし我々が調査で出会ったのは、沖縄人の容姿や姓を持っているのに日本語が喋れない「奇妙な外国人」としてしばしばまなざされる日系人の葛藤であった。違いを認め合って支えあう関係を結んでいくという社会的な課題は、沖縄ではあまり光をあてられることのないまま残されている。

研究の全体については、沖縄人と日系人・定住外国人の関係を問うていく作業が必要であろう。その上で、ホスト社会としての沖縄の社会的な課題を整理していくことが、今後の課題となる。

語り

語り 1）—成人アメラジアンのアイデンティティ

A1 さんの語り

（自分のことをアメリカ人と思いますか？）

「ばりばり（そう思う）」。

（沖縄にいて、外国人であることを意識することはありますか？）

「ハーフだから、どっちにとられてもうれしいような、悲しいような。アメリカ人は私を見て、『あ、日本人』とか、逆に沖縄のおばぁに『外人』とか言われて、あ、そうかな。まあ、確かに半分そうだけど、とても複雑な気持ちかな。…普通の外人だったら気づかないと思う、自分に人権がないっていうのは。日本語を読めるからこそ、何で？って。」（29 歳女性、アメリカ国籍、沖縄生まれ）

A2 さんの語り

「お父さんが海兵隊を引退したのは、妹がちょうど高校 1 年になるときだったんですよ。兵隊

はいつも、3 年、5 年で引越ししないといけないんですけど、自分はもう高校は行っているから、妹もそうだし、引越ししたくないと、それで引退したんですけど。かわいそうだけど、お父さん、本当は引退したくなかったはず。その後、軍属になって、でも現地雇用だから基地の病院は無料じゃない。でも、軍属だから、外国人登録できないから、日本の保険には入れなくて、今、ほんと病院行きたいんだけど、怪我してます、ほんとに行きたい。…友達は、日本人、ハーフ。アメリカ人が一番少ないと思う（高校の同級生などはほとんどアメリカに帰ってしまったので）。」（23 歳男性、アメリカ国籍、生後まもなく来沖）

A9 さんの語り

（アメリカ人っていうのを意識することはありますか？）

「自分は自分で、ハーフってわかってるから、それでいい。でも逆に周りからよく決め付けられる。外人だから威張ってるでしょうとか。外人も、あんたは外人の真似して、とか。いまだにこんなことがある。…自分がショッピングセンター歩いてると、だいたい警備が後ろから来る。スーパーで買い物してるときも、大体警備が見えるところにいる。」

（基地内の学校ではハーフの子とアメリカ人の子は混ざり合って遊んでいましたか？）

「ある程度は混ざってるんだけど、ある程度は離れてる。自分なんかが乗り越えたものと、この人たち（アメリカ人）が乗り越えたものとが違うから。普段の遊びだと同じくらいの経験でも、（基地の）外のことが全然（違う）。…お父さんとお母さんが結婚するとき、お母さんのほうのおじいちゃんが、外人と結婚するなら出て行けって。お父さんのほうのおじいちゃんもすっごいアメリカ人で、WW2 でも戦ってて、日本人と結婚するなら出てけって。今はもう許していて、でも、子どものころ（沖縄の）おばあちゃんの田舎に行ったら、その辺の人に外人、外人言われて、親戚も変な雰囲気で。こんなのも乗り越えて、何でも乗り越えられる。」（23 歳男性、アメリカ国籍）

（語り２）―台湾人の「進学」「留学」「自営」志向

T10 さんの語り

「留学でアメリカに行くまでは、自分のアイデンティティは日本人っていうイメージがあったんですよ。で、アメリカ行って、人種の坩堝で生活していくと、やっぱりどうしても中国人としてのアイデンティティが目覚めてくるんですよね。日系社会も中国系社会も大きい社会なもんですから、その両方、見ていったときに、やはり中国系なんだなあと感じる部分があるわけなんですよ。…これ、なんだと思います？食べ物なんですよ。中華店いくと、あっ懐かしい味だ、やっぱりこれが俺のルーツかなという感じなのね。…（日本国籍への）帰化は、国際政治がどうなるかわからないですから、台湾のより日本のパスポートのほうがよいと、子どもも日本の国籍に、ということでやりました。」（42 歳男性、3 世、日本国籍）

T7 さんの語り

（子どもさんへの期待はどういうふうにお持ちですか）

「やっぱりグローバリズムがほしいですよね。（台湾人の家に生まれたから）台湾の文化。今度

学校、社会に入りますよね。どの社会、どの国に行っても別によろしいです。アメリカに行ってもどこに行ってもよろしいですよね。ここ（沖縄）でそだっているので、沖縄人とも言えるし、台湾人とも言えるし、日本国籍だから日本人とも言えるし、インターナショナルみたいな、そういうので育つようにしたいですね。」（52 歳男性、1 世、日本国籍）

T5 さんの語り
「進路をどうしようかと思って、親父から台湾の大学も受けられるっていう話があったんだけど、ホームステイの、沖縄タイムス（註：沖縄の地元紙）の留学の 1 期生でアメリカに行った。その前に、高校生のときにもアメリカに、これは華僑の青年交流で行った。それらの交友関係がすごい広がり方をしたよね。そのときに知り合った人が世界中に散らばってて、オーストラリアにもアメリカにも（華僑が）いて、「どこどこで何々がほしいんだけど集められんか？」って。そのバックグラウンドには、父親が華僑（1 世）って言う人がたくさんいて、僕らのビジネス・ネットワークも華僑の 2，3 世の人たちが作った一つのネットワークですよ。」（36 歳男性、2 世、日本国籍）

（語り 3）　―使い分けられるアイデンティティ：台湾人の＜戦略的ハイブリディティ＞
T8 さんの語り
（あなたはどこから来たのって聞かれたら、なんて答えるんですか？）
「臨機応変。この人には日本人って言ったほうがいいなと思ったら日本人。この人にはふたつ（台湾人・日本人）言ったほうがいいと思ったらふたつ。中国で商売をしようと思ってるんだけど、中国では、今、台湾なまりの中国語っていうのが流行なの。おしゃれな、あるいはえげつない。大阪弁みたいな感じ。僕はぜんぜんなまりのない中国語もしゃべれるから、最初、中国人に「日本人」って自己紹介してなまりのない中国語しゃべってたら、日本人って甘く見られてお金を高めに言ってくるから、「台湾人」っていうことにして、台湾なまりの中国語でべらべらしゃべって。とにかく臨機応変に。…今は台湾より中国にうまみを感じる。オリンピックも上海博覧会もある。稼げるぞ。ここでやったるぞーって大陸だからね、島国とぜんぜん違うもん、走っても走っても陸だよ。自分はもう蟻だよ。蟻にも満たないくらい。その中でがんばれるっていうのはやっぱり旨みがある。」（35 歳男性、1 世、7 歳時に来沖）

T5 さんの語り
「（僕ら 2 世は）どっちかといえばバイカルチャー。両方の習慣や文化を持ち合わせてるから。華僑というより倭僑に近いと感じるときもある。」（36 歳男性、2 世、日本国籍）

（語り 4）―日系ブラジル人、ペルー人の来沖プロセス
B6 さんの語り
「父が小さいときからずっと、自分は長男で日本にどうしても帰らなきゃいけない、そういう風に約束してきたからそのつもりでいなさいっていうような言い方をしていた。（戦争の後だから）お友達とか学校の先生とか、みんな（沖縄行きに）反対だった。（戦後）12 年くらいたっ

てから来たの。まだ掘っ立て小屋みたいな、バラックの家で、ちゃんと水が出なくて。いろいろ不自由はあったけど、来てよかったと思う。向こうに、ブラジルにおったらそのまま、何の変化もないまま、のほほんとね、過ごしたかもしれない。ここにきて、貧しい生活見て、戦争でみんな打ちひしがれてるでしょ。(自分自身の夢)、何やりたいとかいっぱいあったけどね、希望もいっぱいあったけどね、言えなかったですよ。」(70 歳女性、2 世、日本国籍)

P5 さんの語り
「まず親戚の紹介で、群馬の工場。姉と、自分と、あと 3 名、同じ職場だったから、ほとんどスペイン語使って、あっちのおじさんもう怒って、日本語でしゃべりなさいという。両親も、何で日本にいるのにこんなになってるか、もう今からスペイン語しゃべらないとか言って、怒って、スペイン語つかったら 1 回 100 円、お金払ったんだから。」(32 歳女性、2 世、ペルー国籍)

P7 さんの語り
「フジモリ大統領っているでしょ。日系人が大統領になることにあんまり賛成しない人たちとか、いっぱいいたわけ。お父さん、いつも危ないって言ってね。静かなほうがいい、あんまり顔、見えないほうがいい。」(53 歳男性、2 世、日本国籍)

(語り 5) ―日系ペルー人、ブラジル人の南米における<エスニック・ネットワーク志向>と<ローカル・ネットワーク志向>
P1 さんの語り
「友達は、遊ぶのもみんな日系だし。親戚集まってもみんな日本人だし。地元の人とは、付き合いなかったからねえ。」(29 歳女性、3 世、日本国籍)

P6 さんの語り
「自分でも、あんまりペルー人と友達しないようにっていうことはあったんですよね、小さいころ。なんか泥棒とかさ。友達になっておうちにつれてくると、なんか、なくなるんですよ。おもちゃとか。それで、遊ばんように。」
「住んでいる地域はほとんどペルーの人で、普段はこういう人たちとかかわりは多いんですけど、週末は日系人とかかわりを持つんですよね。日系人は沖縄の人、多かった。内地の人に沖縄の人が馬鹿にされてたらしいんですよ。で、沖縄県人会っていうか、沖縄人どうしのグループ、集まりがあって、沖縄出身者で固まったんですよ。日系人の友達同士でもスペイン語でしゃべってました。」
(ラ・ウニオン校で日本的な行事はありましたか?)
「ウンドウカイ、フォークダンスやって、日本の国歌歌って、赤・白みたいなチームが、明治・大正・昭和チームだったんです。あと、こどもの日のこいのぼりとか。」
(38 歳女性、2 世、ペルー国籍)

P2 さんの語り
「通っていた学校でストライキがあって、で、ラ・ウニオン校に転校した。あんまりね、行きたくなかったよ。もう学年が始まっていて、ほかの学校は受け入れてくれなかったから、でもラ・ウニオンは知り合いがいたから。前の学校は国立学校で、みんなお金がない。ラ・ウニオン校はお金持ち。みんな、遊びばっかりで。ぜんぜん違うから、やっぱりちょっとショックだったんですよね。ペンもノートも高級品で、私は地味なので行ってみんなに見られた。今考えたら、ラ・ウニオンの人に比べたら、ペルーの人、友達、みんな温かい。人間的な温かさがあるんですよね。」(38 歳女性、2 世、日本国籍)

B6 さんの語り
「おじさんおばさん、両親は日本人で、自分はブラジル人と思ってましたね。白い子も黒い子もみんないっしょに遊んで。」(70 歳女性、2 世、日本国籍)

(語り 6) —日系ペルー人、ブラジル人の沖縄における<エスニック・ネットワーク志向>と<ローカル・ネットワーク志向>
P4 さんの語り
「ペルーの独立記念日は、ペルーの国歌歌って、ペルー協会の会長挨拶して、ペルーのダンス踊って、そのあとパーティー。家族でも、正月、バレンタイン、母の日はパーティーします。独立記念日は 100 人くらい集まります。ほかにも友達とパーティー、ペルーの料理作って、踊って、楽しいよ。」(45 歳男性、2 世、ペルー国籍)

B4 さんの語り
「日本に来てからは、日系ブラジル人とはできるだけ付き合わないようにしてた。日本語覚えるために。こっち来てから、ちょっと飲もうとか深く付き合ってるのは全部日本人。独立記念日とかもしてない。沖縄のお祝い事だけ。」(34 歳男性、2 世、日本国籍)

(語り 7) —外国人としてまなざされる体験とアイデンティティ
P5 さんの語り
「ペルーにいたら日本人、こっち来てからみんなペルー人って言うし、だから、もうねえ、自分の国、作ろうかなー(笑)。こっちで(沖縄で)何回もいじめられたことある。お友達は、叩かれて入院したこともある。自分たちだけの国、作るかなーと思って。こんなこともあった。」(32 歳女性、2 世、ペルー国籍)

P1 さんの語り
(ペルーにいたころは、自分を日本人と思っていたんですよね)
「こっち来てから、やっぱり周りがねえ。『あんたはペルー人でしょ』とか言うから、『あー、私はペルー人なんだ』とか、思うようになる、だんだん。洗脳じゃないんだけど、あー、そうやって見てるんだなーとか。」(29 歳女性、3 世、日本国籍)

（語り 8）—日系ブラジル人の就学をめぐる体験

B10 さんの語り

「教育委員会に申請しに行ったんですよ。（子どもの入学の）許可をもらいに。なんかちょっとショックを受けたのはですね、僕らは、国民という気持ちが強いんですよ。で、向こうとしたら、君らは外国人だから、（公立学校で）勉強する義務はないと、そういう表現だったのね。僕は驚きましたね、教育委員会の対応については。」

（語り 9）—日系ペルー人の帰化をめぐる意識

P2 さんの語り

「帰化したらすぐ職場の人に呼ばれてね、『ああ、あなたも（私たちと）同じ日本人になったよ。』って言われて。別にいいんだけれど、私、気持ちは変わらないよ、同じ日系人と思っている。」（38 歳女性、2 世、日本国籍）

（語り 10）—日系ブラジル人の南米時代の日本イメージ

B 8 さんの語り

「日本人みなまじめとか、親切、日本ではもっといい生活できるよ、とか、泥棒いない、嘘つく人いない、離婚する人もいないとか。日本に来たのは 96 年なんですよ。ブラジルでやってても（インフレで）きりがないからもう、引き揚げようってことで。」（40 歳女性、3 世、ブラジル国籍）

（語り 11）—日系ブラジル人の来沖当初の印象

B1 さんの語り

「自分の（ブラジルの）家には天皇陛下の写真がありました。テレビのイメージで、（日本は）金持ち、教育がしっかりしている感じで。12 歳で（沖縄に）来た当時の印象が、周りが何もなく、サトウキビ畑。こんな山に連れてこられて、親を憎んだりとか、そういうのが強かった。お釣りが返ってくるようなトイレで。サンパウロ、大都会だったのに。」（39 歳男性、3 世、日本国籍）

（語り 12）—日系ペルー人にとって意外な沖縄での親族関係

P2 さんの語り

「（沖縄に来てから）沖縄の親戚と連絡を取るってことは、少ないです。ペルーの人（日系人）から見たら少ない。ペルーにいたら、親戚とはしょっちゅう連絡取り合うけど、日本人は、少ないですね。1 年に 2 回、お正月とお盆くらい。」（38 歳女性、2 世、日本国籍）

P 4 さんの語り

「ペルーでは働いて、給料もらって、友達とか親戚とか、（仕事のあとに）あっちこっちいったり来たりしますよね。沖縄、こんな、できないよ。仕事終わったらもうまっすぐお家さ。ペルーだとそんな日はないよ。毎日（親戚の家に）行ってるよ。仕事終わって、親戚のところ行っ

て、また友達のところ行って映画見に行ったり遊んだり。ペルーのほうが楽しい。ペルーで、親戚のところで刺身を食べました。沖縄では食べてないのにね。」(45歳男性、2世、ペルー国籍)

(語り13) ―アメリカ人、台湾人による沖縄へのメッセージ

A1さんの語り

「沖縄の人には、もうちょっと沖縄だけを見るんじゃなくて、アジア全体を、全体的に自分がどういう役割を果たしているのかを見てほしい。そして、自分の悩みがいかにちっぽけかってことを、その意識を高めてほしい。太平洋地域というスケールで仕事をしてて、(沖縄に)帰ってくるとモノレールが赤字とか、スケールの違いにギャップを感じる。」(29歳女性、アメリカ国籍)

T5さんの語り

「沖縄の人には敏感になってほしい。他力本願なところがやっぱりあるから。沖縄はどうありたいって聞かれたとき、毅然とした答えがありますか?情報あるのにひろわない、どうにかなるさっていう時代じゃないのに。難しいけど、僕らの世代が立ち上がらないと未来はないよ。僕ら2世の華僑はみんな同じ思い持っている。」(36歳男性、2世、日本国籍)

(語り14) ―台湾人による自治体への提言

T4さんの語り

「日本語にとらわれないところが(米軍基地だけじゃなくて)もっと広がったらいいと思う。外国人は意見を聞いてもらえるところがあまりないと思う。選挙権さえもないし。外国人がどうしても固まってしまう、フィリピンの社会、インド人の社会、台湾人の社会。自治体が外国人どうしをつなげるような地域交流をしたらいい。子どもだったら児童館に集まるとか、老人だったらデイケアに行くとか。この調査だって、外国人という枠を作っていますよね?あの人が外国人、じゃなくて、いろんなエスニックの人たちが、一緒に集う場所、一緒にできる場所が、ひいては社会を豊かにするんじゃないかな。日本の社会を。」(29歳女性、1世、日本国籍)

文　献

野入直美「石垣島の台湾人ー生活史にみる民族関係の変容ー」(一)『人間科学』第5号、琉球大学法文学部人間科学科紀要、2000年。

野入直美「石垣島の台湾人ー生活史にみる民族関係の変容ー」(二)『人間科学』第8号、琉球大学法文学部人間科学科紀要、2001年。

野入直美「沖縄における日系人・定住外国人の国境を越える移動とエスニック・ネットワーク(上)ーアメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人の意識調査からー」『人間科学』第14号、琉球大学法文学部人間科学科紀要、2004年。

鈴木規之・玉城里子「沖縄のフィリピン人ー定住者としてまた外国人労働者としてー(1)」『琉

球大学法学』第 57 号、琉球大学法文学部法政学科紀要、1996 年。
鈴木規之・玉城里子「沖縄のフィリピン人ー定住者としてまた外国人労働者としてー（2）」『琉球大学法学』第 58 号、琉球大学法文学部法政学科紀要、1997 年。
谷 富夫「定住外国人における文化変容と文化生成」宮島 喬・加納弘勝編『国際社会②変容する日本社会と文化』東京大学出版会、2002 年。
谷 富夫「民族関係の可能性」『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房、2002 年。
堂前亮平『沖縄の都市空間』、古今書院、1997 年。

（のいり なおみ・法文学部助教授・社会学）